おちほ

第55号　平成18年6月25日　発行　社会福祉法人　椎の木会　**落穂寮**　発行者　山下　陽一

五月の桜の中で
氏神祭

毎年五月一日は氏神祭。地域でも行われますが、私達も落穂寮、一麦寮、近江学園の三施設合同で氏神祭を行っています。今年は桜の開花が遅くまだ咲いている中での氏神祭でした。

当日は天気も良く、朝食後にハッピ、はちまきを用意すると寮生さんも「待ってました！」とお祭気分になってこられます。

今年の落穂寮の神輿は、リラックま、しんかんせん、そして落穂寮オリジナルキャラのナナちゃん（猫）、お祭りにはつきものの巨大な団扇を、職員が勤務後に夜な夜な作りました。

「わっしょい！わっしょい！」と元気なかけ声を出しながら坂道を登って行きます。毎年、沿道の人達も見に出て下さり、声をかけてくださいます。ありがとうございます。

東寺グラウンドまで行き、各施設の神輿紹介。どの施設も力作ばかりでした。その後ジュース休憩、記念写真を撮って、帰寮しました。

毎年氏神祭を行うと、「今年も始まったなぁ」と思います。障害者自立支援法など、時代は新幹線の様に過ぎていきます。私達もその新幹線に乗っていますが、あわてず、リラックスできる心の余裕も忘れない様にしたいと思います。

所感

人間の基本的二つの欲求

理事長　髙井正義

私事ですが、昭和31年4月に当時は石山南郷にあった落穂寮に就職したのが契機になり、その後信楽青年寮、信楽学園、近江学園、しゃくなげ園等の各施設を巡り平成7年3月に県立しゃくなげ園を定年退職するまでの38年間を知的障害児者の教育に携わってきました。

就職当時の落穂寮では四六時中の勤務が常で、入所者の人が起きている時間帯には生活・作業・3食を共にして、夜も入所者の人と同じ部屋で寝起をし、休暇も月に一～二日職員が交代で休むような苛酷な勤務条件であり、いつまで続けられるのか疑問に思い乍らの毎日でしたが、いつの間にか一ケ月が過ぎ一年が過ぎ、事情で信楽青年寮に転勤することになった昭和33年10月までの2年6ケ月が過ぎ去ってしまいました。

最初に落穂寮で感じたことは、この人たちは新しい職員に寄り添ってくる傾向が強いということでした。新人の私にもよだれを流している人や鼻を出している人が次々に寄ってきて、手や顔に触わり話しに来てくれました。最初の一週間程は嬉しいのですが、気持が悪く、不潔な思いがして後ですぐ洗面所へ行って触われた場所を神経質に洗っていました。ところがいつの間にか触われても嫌な気持や不潔感がなくなり、平気になってしまった思い出があります。

後になって何故そのような気持に変化したのだろうかと考えてみますと、この人たちが触れ合いを重ねる度に親しみを持った和やかな態度と笑顔で応答してくれることに気付き、その純真でウソのない姿に可愛いい気持を抱き魅力を感じたことでした。

相手を可愛いく思うようになると、もっと自分のしてあげられることを相手に一生懸命にしてあげようと思えるようになることを知りました。このことは人と人との関わりのなかで、一番大切なことであると感じたことでした。

この人たちに限らず人間にはすべて基本的に二つの欲求があるように思います。その一つは安定（やすらぎに定まる）したいという欲求、もう一つは満足への欲求、そういうものがあると思います。

この人たちがこうした二つの欲求を満たすのにはどういう風にすればいいのでしょう。お父さんの愛、お母さんの愛、あるいは先生の愛という強い触れ合いではないかと思います。自分は愛されているのだ、信じられているのだという気持にこの人たちが満たされていることは、とても大切なことだと思います。たった一人のお父さんでもいい、たった一人のお母さんでもいい、たった一人の先生でもいい、私はこの人から信じられている、愛されているということであれば、その人はきっと人から嫌がられるようなことはしないのではないかと思っております。

ややもすればお金・物が中心に考えられやすい現時代でありますが、すべての人間の心の基本的な二つの欲求である、安定と満足感の覚えられる、人と人との関わりを大切にしていきたいものです。

しょかん

拝借三分間

寮長　山下陽一

美術展開催

今年（二〇〇六年）二月、京都市美術館で展覧会が開催されました。京都・滋賀両府県にある二十三の知的障害施設利用者により制作された作品展です。

この展覧会は絵画や粘土作品の制作活動を紹介することにより、他の展覧会にはない独自な世界を皆さんに紹介しようというものでした。ここには障害を持っているけれど、自分の持っている力の出し損ねのない本来の力が発揮され私たちや美術ファンにとって斬新ささえ感じさせる作品ばかりです。

ご覧いただいた人々は二歳の幼児から九十六歳の方まで、また、市民、学生、美術批評家、美術教育の先生方など幅広い層に渡る人たちにご覧いただいたようです。

作品の一つに高さ八メートルもある帯を下げたような切り絵作品がありました（わたしはこの巨大な帯の三本作品を「人寄せ曼陀羅」と名付けましたが）。その作品を二歳程度の女の子がご両親と一緒に来たのでしょう、つないでいる親ごさんの手を振り解くようにして駆け寄り唖然として観入っているのです。この子には三本の巨大な帯がどんなふうに見えたのでしょう。また、九十六歳の方はこの展覧会を実施するにあたってのスポンサーのおひとりで、作品の説明にうなづきながらしっかりした足どりで全作品を通して観ておられました。

腰で観る

多くの鑑賞者のなかに美術専門家もおられたようですが、その人たちの鑑賞の姿勢は「ものを観る」ということはこれかと強く感じさせられました。ご自身の興味のある作品について視線を下げ腰を据えて作品を観ておられるのです。まるで「何も見逃さない！」といった気迫のこもった様子でした。おそらく複雑な要素を持っていた作品とサラッと感じ取る作品があるのでしょうが、他の作品と比較しながら鑑賞されていたのでしょうか、作品と作品の間を何度も往復しながら鑑賞しておられました。一つの作品に対峙してご覧になる様子に、プロフェッショナルの迫力を感じたものです。

物差しに合わぬもの

私たちのものの見え方は蓄積された文化による影響を受けています。古代エジプトの遺跡には顔は横を向き身体は正面になって足は顔と同じ方向を向くねじれた表現を用いています。古代人たちは人間の様子が本当にあのように見えていたのかもしれません。また、王と王妃の彫刻の傍に彼等の王子なのでしょうか小さい石像が添えられている。頭と身体のバランスは幼児特有のものではなく、大人のバランスを持った坐像になっています。これも、子どもは大人のミニチュアに見えていたのではないか、そんなことを想像させられます。

時代は下って、距離感や奥行きを表現する方法として遠近法が発見されたのはルネッサンス以降になります。このようにそれぞれの時代の文化を背景に、ものの見え方はそれに規制を受けることは避けられません。

ところで、優れた天才たちは既成の認識の枠や殻を破って新しい世界を創作しようとします。たとえば、空間の認識を壊すと顔の正面と側面をカンバス一枚にあらわすピカソなどの作品に象徴されます。ただ、ピカソが違っていたのは、意識的に空間を破壊したり正常な感覚を取り戻したりすることができたことでしょう。壊れたままだと一般の社会生活は随分難しいものになったのではないか。

さて、知的障害をもつ人は私たちの感覚とは違った世界が広がっているようです。ちょうど天才たちが骨身を削った努力の果てにやっと垣間見る世界をいとも簡単にそして日常的に作品として表現してくれるのですから。

ところが、私たちはその創作について見落としたり通り過ぎていっています。なかには自分の感覚の尺度に合わぬものは「無価値！」といわぬばかりに排除さえしようとしています。

三分間の拝

びわこ学園の利用者による足で練られた長い「陶の棒」を展示されたときは「これが作品か」といわれました。実際作品展に関わった私にもわからなかった。ところが二〇年を経て今そのような作品群に違和感を感じていないことに気づきます。これらの作品を世間に紹介した人たちは大変な冒険だったのではないかとそのご苦労を思います。

彼らに接している傍の者のモノの見方が問われています。今は漠然とした印象かもしれません。しかし、将来その作品が違和感なく受け入れられるときが来るかもしれません。今目の前にある一つひとつの作品を大切に接し、その作者と喜びを共感したいものです。通りすがりに気になる作品を三分間でいいですから、何もいわないで腰を据えて魅入ってほしいものです。

新人さん♡いらっしゃーい！

山本（ヤマモト） 恒平（コウヘイ）

昨年度九月より落穂寮男子棟職員としてお世話になっている山本恒平です。中にはすでにご挨拶させていただいた方もおられますが、この場を借りて改めて自己紹介をさせて頂きます。

出身は福井県福井市。中心地だというのに、観光名所が一つもない中途半端な田舎で生まれ育ちました。

祖父が認知症になった事をきっかけとし福祉に興味を持ち、龍谷大学短期大学部社会福祉学科に進学しました。進学を果たしたことで目標を達成した気でいたのでしょう。ニートに片足突っ込んだ生活を送った結果、昨年三月に半期留年が決定しました。（お恥ずかしい話ですが……）。

九月までの半年間は今まで生きてきたどの時間よりも充実したもとなりました。沢山の人にお世話になり、8月に落穂寮に就職する事が決まりました。運がむいてきたのでしょうか（笑）。

ここへ来てからの生活は今までのものとはまったく違うものになりました。早寝早起きが身に付き、ごはんも三回きっちり食べる様になりました。すこぶる健康的な生活だと言えるでしょう。ただ一つだけ大きな問題を抱えています。それは免許がないという事です。自転車で勝負してきましたが、もうしんどいです（切実）。今年中に取りたいと思います。

ここでお世話になって半年が経ちましたが、この半年は寮生さん、職員さんに迷惑のかけ通しでした。寮生さんの要求は理解できず、職員さんに教えられた事は何度も間違えたりしました。申し訳ない気持ちで一杯ですが、これからも自分なりの体当たり精神で仕事をしていき、寮生さんといい関係を築けたらと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

小崎（コザキ） 梨絵（リエ）

初めまして、今年龍谷大学短期大学部社会福祉学科を卒業し、女子棟で働いています、小崎梨絵と言います。

私がこの落穂寮で働きたいと思ったきっかけは、ここで行った実習でした。夏に6日間、冬に8日間という短い間ではありましたが、職員さんの対応や寮内の雰囲気を見ていく中で、「私もここで働きたい」と思う様になりました。

まだまだ業務の中で分からない事や寮生さんとの生活の中で対応が出来ない事がたくさんあり、他の職員の方にはご迷惑ばかりかけています。これから長い時間をかけて寮生さんや御家族の方とも信頼関係を築いていけたら、と思っています。

私はスポーツが大好きで、バドミントンやホッケー、

バトンをやっていました。体を動かす事を生かして、日課などにも取り入れてみたいと思っています。新人ながらマンモス班・梅班を担当させていただいています。マンモス班では、いつも楽しく歌を口づさみながら歩行をしています。

学生時代にある方から「知的障害者と関わる仕事は、キラキラ輝く宝物探しみたいなもの」と教えてもらいました。毎日の生活の中で、ふとした時に「あっコレだ」と思える事がいつか来ればいいなと思います。つまづきながらも、毎日笑顔いっぱい、元気いっぱいで頑張っていきますので、みなさん、よろしくお願いします。新人の小崎からのメッセージでした！

『あったかぁいね、春の日差し』

農道にはつくしんぼがチラホラ…なのに桜の木を見上げればまだ蕾すら見当たらない。今年はそんな春の始まりでした。その為、例年より遅咲きの桜となり、いつもなら葉桜の下でのお花見が恒例となっていたものが、今年は桜の花が散り行く一番素敵な時期と落穂のお花見が重なるのでは…、と職員は皆心躍らせていたのでした。けれども当日は雨。なんで雨？どうして？雷様の意地悪～😩結局、この日は棟内でのんびり過ごす一日となりました。

その日からしばらく後の、とある日。空は青くて、空気はポカポカ幸せ陽気…こんな日に室内に居るだなんてもったいない！そこで男子棟は近所の公園へプチピクニックへ行くことにしたのです。途中の自動販売機で各自好きなジュースをチョイスして頂き公園へ。そして公園の広場でケーキと共におやつタイムをしました。

〝お花見の代わり〟、というわけでは決してありませんが、春のあったかぁい太陽の下で、寮生さん・職員とがニコニコ・ワイワイしながら美味しい物を頬張る光景って、なんだかとても微笑ましくて、温かいもんだなぁと感じた私なのでした。

ゆかいなアーティストたち

日課がない雨の日には、たいていホールにて造形をやります。主にお絵かきです。今日も素敵な顔や車、グルグルグルグル～と大きな円を楽しそうに描いておられます。どれも一人ひとり個性があって、中には、これは何だろう？と思うような絵もあるのですが、見ていると不思議で面白くて一体どんな気持ちで描かれたのかなぁとついつい考えてしまいます。

さてさて最近では、みんなで一枚の絵に取り組みました。職員が象の枠を描き、その他の絵や模様は寮生さんたちが描いてます。枠があっても、うまく枠中に留めるのはなかなか難しいようで、勢いのある手は紙からはみ出しても構わず、描かれてゆきます。味のある面白い作品が出来上がりました☆

この絵の他にも、各日課班の教室や各棟・食堂前や食堂内に飾られています。ちょっとした時に目を留めて、絵を見ていると、ホッとしたような幸せな気持ちになります。絵を飾る事で、こんなにも雰囲気が変わるものだと知り、これからも造形に力を入れて取り組みたいと思います。機会があれば是非‼少し立ち止まって見てみて下さい。きっとあったかい気持ちになれますよ☺

残念無念！春のお花見遠足

さてさて、本年度最初の行事、毎年恒例の「お花見遠足」が四月十五日に行われる予定…でした。しかし残念ながら雨で中止に。前日までは、いい天気が続いていたのになぁ。まあここはいつまでも残念がっていても仕方ないので気分を切り換えて女子棟のホールで「お花見お食事会」を行うことになりました。女子棟のホールからは満開の桜の花が窓ごしに見えお花見気分に…ということもなくここはやはり「花より団子」テーブルに並べられた、お弁当になるはずだったごちそうの方に目が行ってしまう寮生さん達でした。さて配膳も終わり、みんなで「いただきまーす。」今回のメニューはみんな大好きなカラアゲ・春らしさを思わせる菜の花あえ・家庭料理の味お煮しめなどなど…デザートには春の味覚いちごをいただきました。外で食べるお弁当には格別のおいしさがあるものですが、そこはお腹いっぱいになってしまえば大満足、みんなニコニコで食べ終えました。ただ運動もせずにお腹いっぱい食べてしまってカロリーオーバーが少々心配、明日からしっかり運動しましょうね。ということでその日は一日みんなでのんびりと過ごしました。来年は晴れるといいですね。当然、この後は職員の間で雨を降らせた犯人さがしが…私は今年の新人さんが怪やしいと思うのですが。果たして晴れ女？雨女？

▲外の桜が満花です。分かります？

▲新人の小崎さんと三沢さん

みんなご機嫌ドライブタイム♪

女子棟では毎週土曜日に、マイクロバスでドライブに出かけています。約一時間のドライブでコースは毎回違い、最後にはお楽しみのジュースタイム。それでは五月二十日の様子をクローズアップ！

五月二十日（土）

「ドライブ行きますよー」の声がかかり、みなさん一斉に外へ。嬉しい気持ちが先走り、靴も履かずに玄関を出て行かれた方もいます。バスに乗り込みさあ出発！今日は石部→栗東→石部コース。バスの中ではみなさんの好きな歌が流れています。手を叩きながら体を揺らしたり、一緒に口ずさんだりと音楽にノリノリな寮生さんや、ずーっと窓の外を眺めておられる寮生さんと、みなさん様々。中には座席の間から外を眺め、コンビニの前を通過する度に喜んでおられる方も…。ジュースが待ちきれない様子です。

▲今日はどこまで行くのかな？

さあ、いよいよお楽しみのジュースタイムです‼ バスがコンビニに停車すると、みなさんのテンションは急上昇。職員がジュースの入った袋を持って戻って来ると、配られるのを待てずに立ち上がる方もチラホラ。ちなみに女子棟寮生さんの好きな飲み物第一位はカフェオレ、二位はコーラなんです。好きなジュースを飲んだ後は、まっすぐおちほへ帰寮。

たくさんの笑顔が見られるので毎日でも連れて行きたいのですが…たまに行く方が楽しみは倍増するものですよね。さあみなさん、次週まで作業や日課を頑張りましょうねっ！

▲ジュースをゴックリ！

▲満足気なこの表情。

㊗第56回落穂寮　開寮記念日

四月を迎え、春になったというのに、連日天気はぐずつき、雨模様の日が多く、気温も上がらず、なかなか暖かくならないと思って迎えた五月一日。五十六歳の誕生日を祝福するかのように快晴の五月晴れの下、落穂寮開寮記念日を催す事ができました。

会場となった食堂には、寮生さんが描いた絵を中心に、造花、風船で作られた動物達が壁面に飾られ、各テーブルには春色の大地に花が咲き、蝶々が舞い、とてもおだやかな春の空気が漂っていました。そして今回の昼食はなんと、海鮮ちらし寿司。このところ、制度の変更で食費まで影響を受けていただけに心配していたのですが、この時ぐらいはとごちそうが出され、皆、目がキラキラ。いただきますを今か今かと待ちながらも、まだまだ続くおはなしとセレモニー。寮長の挨拶の後、職員の三浦さんの永年（女子職員は五年）勤続表彰があり、三浦さん（これからもよろしく）、金一封と松井優子さんから感謝の花束贈呈。…と、これでやっと終了。ようやくいただきますをしてごちそうを食べる事ができたのでした。とってもおいしかった昼食に、みんな大満足の開寮記念日でした。

ラーメン　ホウカイ

ある日、グルメ好きな職員が、街で見つけた一軒の屋台ラーメン。当然食べなければ気が済まず、食べてみると驚きの味。それもそのはず。ラーメン屋の大将は石部に来られて三十年のその名も寶海。経験と研究を重ね、特有の匂いを取り除いたなめらかな舌触りの焼豚と、塩分カットとオリジナルなコクでお年寄から子供まで最後の一滴を楽しめるスープとの融合を実現された、こだわりの免品。グルメな職員は、自慢の舌を満足させるべく、次々と平らげ、全メニューを制覇。話を耳にした他の職員も次々と通いはじめ、遂に常連客に。ひょんな事から一度寮生さんにも食べてもらいたいとの事で何とか話をつけて実現したのが寮内での屋台ラーメン昼食会。私も含め、全寮生が初体験の、それもこだわりの免品とあって、大満足のみなさんでした。ごちそうさまでした。

▲ヘイ！おまちどー！

▲ハフ！ハフ！うまーい!!

泉

▽平成十八年五月一日、落穂寮は五十六回目の開寮記念日を迎えました。南郷の地で生まれ、石部に引っ越し、現在に至るまでの間に福祉制度は大きく変化し、地名まで湖南市に変わりました。生まれた当時の糸賀先生の思いをどのように引き継ぎ、何を伝えていかなければいけないのか。『落穂寮』という『福祉の思想』を大切にし、単なるサービス業として存在する名ばかりの福祉施設に陥らないように心がけなければいけません。人も物事も、ただ年を重ねるだけで存在価値が高まることはないのですから、毎年の記念日を、胸を張ってお祝いできる日にしていけたらと思います。皆様、よろしく御願い致します。

木言（こと）

枯れているように見えていても、ときがくれば、芽を出してくる。待っているときが長ければ、これでいいのかと不安になる、焦る、苛立つ。待ちきれなくても手を出してしまう。すべてがそこで終ってしまう。ここまでかけた時間まで。今見えないものは、この先にある。やはり、最後は、信じること。相手を、己を、この過程を。